

2012 年ロンドンオリンピック・パラリンピックのスポーツレガシー

～構造分類フレームワークを使用して～

スポーツビジネス研究領域

5014A009-8 小川祥加

研究指導教員 間野義之

◇緒言

近年、国際オリンピック委員会（以下、IOC）がオリンピック競技大会に関連して最も注目しているテーマとして「オリンピック・レガシー」が挙げられる（間野，2013）。オリンピック・レガシーについて、学術界では様々な議論が行われており、近年ではレガシーの定義や分類に関する先行研究が行われてきた。Preuss (2015) は、これまでのレガシー研究を踏まえ、レガシーの定義を、6 つの要素により示し、レガシーとインパクト、サステナビリティ、レバレッジの違いについても明確な区別を行っている。また、各レガシーは、インフラ、知識、政策、ネットワーク、感情の 5 つに分類できると提案している。

一方、過去の大会における事例研究では、ネガティブなレガシーに対する対応が求められており、その対応として大会計画を立てることが重要視されている (Ritchie, 2000)。IOC も各大会招致都市に招致段階でのレガシー計画を求め、2012 年大会招致時より、大会コンセプトやモチベーションと合わせてレガシーのコンセプトを立候補ファイルで述べることを義務付けた (IOC, 2003)。同大会招致に成功し、開催したロンドン市は大会計画が詳細になされており、レガシーに対するコミットメントも高かったため、レガシーの創出に成功したとされている (Tramantano, 2015)。しかし、レガシー研究において事例研究が十

分ではないといった指摘があるように (Leopkey and Parent, 2012)、レガシーの創出に成功したとされているロンドン市のレガシーについても整理が行われておらず、どの分野においてどのような特徴のレガシーが残ったのかが明らかになっていない状態である。

◇研究目的

そこで本研究では、2012 年大会時においてレガシーの創出に成功したとされるロンドン市のレガシーを、これまでのレガシー研究の知見を集約した Preuss (2015) の定義とフレームワークを使用して明らかにすることを目的とする。

◇研究方法

調査対象とするのは、英国政府とロンドン市が協力し、2013 年より公式に発表している「The legacy from the Olympic and Paralympic Games」(以下、レガシー報告書) 3 年分とした。なお、このレガシー報告書内に記載されている内容で分類対象としたのは「スポーツと健康的な暮らし」に限定した。

このレガシー報告書に記載されている各項目を、まず、Preuss (2015) が提示したレガシーの定義に基づき、レガシーと、それ以外の要素であるインパクト、サステナビリティ、レバレッジに分け、次に、レガシーに該当した項目について構造分類フ

レームワークとして提示されたインフラ、知識、政策、ネットワーク、感情に分類した。さらに、各構造分類について、それぞれ、ポジティブ/ネガティブ、有形/無形、国内的/国際的、計画あり/計画なしに分類した。

なお、分類に際しては、Plowman ら (2007) の提示した手続きに従い、4 人で行った。

◇結果

分類を行った結果、2013 年は 43 項目中 19 項目、2014 年は 54 項目中 33 項目、2015 年は 63 項目中 38 項目が 5 つの構造分類に当てはまった。

各構造分類別では、インフラが 23 項目、知識が 21 項目、政策が 24 項目、ネットワークが 16 項目、感情が 6 項目となり、合計 90 項目が該当し、レガシーに該当しないものは 70 項目であった。

また、各構造について、ポジティブ/ネガティブ、有形/無形、国内/国外、計画あり/計画なしに分類した結果、ポジティブが全 90 項目、ネガティブが 0 項目、有形が 23 項目、無形が 67 項目、国内が 83 項目、国外が 7 項目、計画ありが 70 項目、計画なしが 20 項目となった。

◇考察

各分類について考察した結果、以下の 9 点が指摘された。

1. 英国政府とロンドン市が認識しているレガシーは、Preuss の定義に従うと、インパクトも含んでおり、非常に広範囲である
2. インパクトとして分類されたものの中にも、そのインパクトが生まれるプロセスの中にレガシーとなりうるも

のが含まれている

3. レガシー、インパクト、サステイナビリティ、レバレッジのいずれにおいてもネガティブなものはごく一部しか報告されておらず、ポジティブなレガシーのみがアピールされている
4. 無形のレガシーがほとんどを占めており、スポーツ参加関連のものが計画段階より最も強調されていた
5. 計画段階より、イングランド地域外、英国外でのレガシー創出を強調し、当該地域で体育・スポーツ関連活動に注力していた
6. レガシー基準の大会アプローチを行い、段階的に計画を発展させていった結果、計画されていたレガシーが多く残った
7. これまでの先行研究の指摘通りの結果が多く見られた
8. 構造分類の項目を重複させて考えることの可能性が示唆された
9. 大会により残されたものに対するレガシー、インパクト、サステイナビリティ、レバレッジの時間の捉え方の不明瞭さが見られた

◇研究の限界

本研究における限界として、オリンピック・レガシーという研究分野が未だ発展途上であり、他の学問と比較して研究の蓄積が浅い点、本研究では研究対象を、2012 年大会を開催したロンドン市のみとしており、研究結果の一般化が困難な点などが挙げられた。